様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年４月２８日現在

機関番号：１４４０３
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2009～2011
課題番号：２１５３０９３０
研究課題名（和文）
社会科学習におけるＰＤＣＡシステム開発研究
研究課題名（英文）
Study on the Development of PDCA system in Social Studies
研究代表者
峯　明秀（MINE AKIHIDE）
大阪教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：10379323

研究成果の概要（和文）：
本研究は，社会科における授業改善の方法論を明らかにし，どのようにシステム化を図ればよいかについて明らかにした。ＰＤＣＡの概念により、社会科の授業開発・改善を連続した一体のものとしてとらえ、各々の社会科学力観に依拠して計画・実践される授業を正当に評価し、改善を図る論理を示した。第一は、授業観・授業の組織・授業の具体にあらわれる教育内容の開発と、なされた授業の事実、学習成果を判定する学習評価を首尾一貫した論理で繋ぎ、そこに見られる授業開発・改善の視点、要素を明らかにすることにより、個々の資質形成に応じた論理整合的なＰＤＣＡを示した。第二は、明らかになったそれぞれのＰＤＣＡを対象化し，問題点を分析することで、自らの授業観を批判的に吟味し，授業改善を図る螺旋ＰＤＣＡを示した。
研究成果の概要（英文）：
The purpose of this study is to suggest how the social studies lesson should be improved. There are two suggestions as follows.
The first one is to make a clear distinction between each stage of the lesson structure of whole lessons, the organization of the lesson, and the teaching skill to lessons, expected learning outcome and fact of the lesson, as well as knowledge, skill, and attitude of learners, and then combine each stage of the lesson structure with Plan-Do-Check-Action in order to integrate them as PDCA cycle. The second is to propose a new methodology for improvement of the lesson, namely, spiral PDCA cycle. This spiral PDCA cycle consists of decision of lesson type by learning outcome at the first stage, PDCA cycle for the lesson according to each quality formation at the second stage, and PDCA cycle with which the lesson is improved by examining and then looking down upon the difference between the relativized view on the lesson, upon which the practitioner depends, and other views on the lesson at the third stage.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010 年度	900,000	270,000	1,170,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：人文社会系
科研費の分科・細目：教育学・教科教育
キーワード：ＰＤＣＡ　　授業改善　　社会科

１．研究開始当初の背景

先行研究における社会科の授業改善の問題点は，構成要素の部分的な改善，一元的な社会科学力観からの授業改善にとどまっていた。これらの問題点を克服し，多元的な学力観に応じる新たな授業改善の方法論の提出及びそのシステム化が急務の課題である。

２．研究の目的

本研究の目的は，ＰＤＣＡの概念により，社会科の授業開発・改善を連続した一体のものとして捉え，それぞれの社会科学力観に依拠して計画・実践される授業を正当に評価し，改善を図る論理を示す。授業観・授業の組織・授業の具体に表れる教育内容の開発と，なされた授業の事実，学習成果を判定する学習評価を首尾一貫した論理で繋ぎ，そこに見られる授業開発・改善の視点，要素を明らかにする。これにより，授業の計画（Ｐ）－実践（Ｄ）－評価（Ｃ）－改善（Ａ）のプロセスが示される。さらに，明らかになった各々のＰＤＣＡを対象化し問題点を分析することで，ＰＤＣＡ自体を相対化し改善・発展させることができる。

３．研究の方法

本研究では次のような手順と方法を採る。

まず，資質形成の違いから類型化される典型的な授業を抽出する。今日，一般的に見られる授業として，社会的事象・出来事の理解を図る授業，日常生活で直面する具体的問題の解決を図る授業，開かれた社会認識形成を図る探求としての授業，社会的問題についての価値判断・意思決定を迫る授業を取り上げる。授業の事実を見取ることのできる事例をもとにどのような資質を形成しようとしているのか，授業の事実から目標・内容・方法を抽出し，授業がどのような能力・資質の形成を図ろうとしているのか，授業観を明らかにする。次に授業はどのように構成されるのか，授業の組織，授業の具体における論理構造を明らかにする。各々の授業に代表される授業類型において，期待する学習成果は何か，評価要素を明らかにする。それをもとに学習者に獲得された学習成果との不一致・齟齬を見取り，授業の計画・実践においてどのような改善を図ればよいのかを示す。そして，各々の授業において，授業者はどのように計画・実践するのかを明らかにし，資質形成に応じた評価要素，改善方法を明らかにすることで，授業のＰＤＣＡが明らかになる。最後に，各々の授業類型に応じたＰＤＣＡを俯瞰し，螺旋的に授業改善を積み上げるための論理を示す。手順として，次の①～③を踏まえる。

①　現状の社会科授業を学習者に期待する学習成果からⅠ～Ⅳの授業類型に分け（表１），各々に合致する典型的な授業を抽出し，授業において授業者がどのように計画・実践し，評価・改善を行うのかを明らかにする。

表１　学習成果による授業類型

X ＼ Y	客観的実在としての社会（対象化）	主観的内在としての社会（内在化）
教授	Ⅰ　社会事象，社会機能，社会構造についての知識の獲得	Ⅱ　社会における個人のあり方（行動）・生き方（態度）の理解
学習	Ⅲ　社会の見方・考え方の探求	Ⅳ　社会における個人のあり方（行動）・社会のあり方の追求

（X 認識内容　Y 獲得方法）

②　Ⅰ～Ⅳの授業類型におけるそれぞれの授業では，どのような評価観点から改善が図られるのか，評価要素，改善方法を抽出する。

③　各類型におけるＰ計画－Ｄ実践－Ｃ評価－Ａ改善の相互関連を考察し，社会科の授業改善としての方法論の特質と意義をまとめる。

４．研究成果

(1)個々の資質形成に応じた授業のＰＤＣＡ

授業改善の方法論は，表１により，自らの授業が社会のわかり方・獲得の仕方によって分類されるⅠ～Ⅳ類型のいずれにあてはまるのかを吟味，確定する。そして，各々の授業類型において明らかとなった開発・改善の観点による授業のＰＤＣＡサイクルにあてはめ，授業者は自らの授業を意図的に対象化し，授業観に合致した授業を構成し学習の実際に応じて改善を図る。しかし，各々の授業ＰＤＣＡは，社会科の学力概念の相違により，社会認識形成における知識や習得方法，市民的資質育成における内容や方法の特質に応じて，以下の問題をもつ。

Ⅰ　知識の量的拡大・効率化を開発・改善の観点とするＰＤＣＡでは，教師が選択し，学習者に獲得させようとする知識を，学習者の日常生活と結びつけ身近に感じられるよう改善が図られる。そこでは獲得させようとする知識を，どのような情報や資料を用いて読み取らせるか，資料選択の範囲・内容や提示する順序が模索される。それゆえ，どのような知識を選択すればよいのか，知識選択における恣意性をどのように排除するのかが問われる。また，学習者の主体性をどのように保障すればよいのか，学習者がなぜ何のために知識を獲得しなければ

ならないのか，動機付けが問われる。

Ⅱ　学習者の内面の表出を開発・改善の観点とするＰＤＣＡでは，子どもを個や集団の学びを指導過程に位置づけ，丹念な観察による実態把握を行う。授業者による発問・指示，資料によって，活動や体験などを連続的に即時に組織し，子どもの中に問いを生み出させる。それゆえ，社会におけるどのような個人の行動・生き方（態度）を理解させようとしているのか，それはどのように正当化できるのかが問われる。また，学習者に形成された社会認識は普遍化・一般化できるものかが問われる。

Ⅲ　知識の構造，推論の組織を開発・改善の観点とするＰＤＣＡでは，到達させようとする知識の構造化を図り，情報・資料の質や範囲，それを用いての推論過程が組織される。どのような理論を選択するのか，その理論を学ぶことにどのような意味が見出されるのかが問われる。また，学習者の主体性を保障するためには，学習者の社会の見方・考え方の発達の特性，状況の正確な把握が課題となる。

Ⅳ　価値的知識の明示，価値判断の論理構造を開発・改善の観点とするＰＤＣＡでは，社会問題を対象化し，原因・結果など因果関係をどのように分析し，予想可能な問題解決の妥当性について判断する場が設定される。また，価値判断と理由付け，価値判断の妥当性が吟味される。それゆえ，社会問題の分析における普遍性・一般性はどのように保障されるのか，自分や集団の社会への関与，手続きはどこまで保障すればよいのかが問われる。

(2)自らの授業観を相対化するＰＤＣＡ

Ⅰ～Ⅳにおけるｐｄｃａの問題点を克服するためには，さらに新たな授業改善を行う必要がある。それは自らの授業観による授業改善と他の授業観との相違を比較し，各々の善さと課題を吟味・分析することである。教科固有の理念が普遍化・一般化されるまでの間，自らの授業観による授業開発・改善の課題を把握し，他の授業観をも俯瞰し拡張した新たな授業開発・改善を図ることになる。（図１）

この授業改善は，次のように示される。

Ｐ（計画）は，ＶＴＲを活用してのデータ分析やモニタリングなどにより，期待する学習成果と授業の事実，学習者に身に付いた学習成果を，多様な開発・改善観点（知識の構造，自己と社会との関わり発言・表現，推論過程，価値判断過程の分析）から省察し，計画と事実との齟齬・不一致を吟味する。その上で，学習者の状況に応じた資質・能力の育成のためには，どのような授業を構想すればよいか，授業観の異なるそれぞれの開発・改善観点を意図的に選択する。つまり，自らの授業観に他の授業観に基づく融合可能な要素を取り入れる。

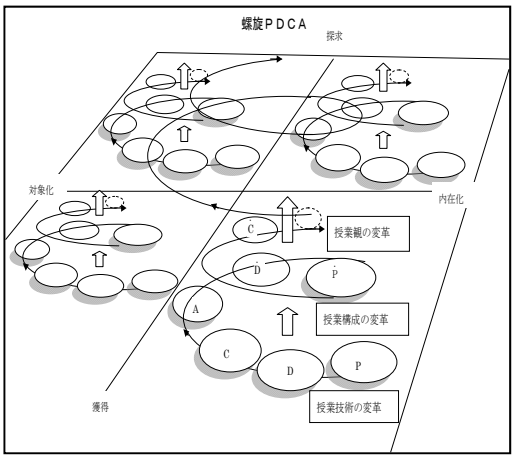

図１　授業観を相対化する螺旋ＰＤＣＡ

Ｄ（実践）は，意図的・自覚的な授業計画に基づき，自らの授業観に基づく授業開発・改善の限界と課題を確認し，異なる授業観からの学習内容や方法を選択・決定し，組織する。学習者の実態，授業展開，資料など，カリキュラム・単元・毎時間の実践に反映させる。柔軟で包括的な実践となる。

Ｃ（評価）は，ＰＤを踏まえた多元的な資質形成の相違に応じる評価観点・評価方法・評価手段によって，めざす資質・能力の育成が図られたかを見取る。

Ａ（改善）は，多元的な社会科の理念に応じた授業の論理と課題を踏まえ，自らの授業の内在的な批判，そして，外部からの批判によって自らの授業観を相対化し，複数の異なる目標を学習者の状況に応じて統合した授業改善となる。

例えば，教員集団における同僚との協働による授業づくりや検討会での意見の異なる者との談話や批判がある。また，自らの授業力量形成のため優れた授業の参観や，新しい授業観や学習観を書物から得るなどの授業研究がある。あるいは，自らの授業の逐語記録やデータ分析，ＶＴＲのモニタリングなど意識的な調整や省察により，授業を改善・変革させていくことが考えられる。すなわち，授業自体の内在的批判，外在的批判を通したＰＤＣＡを行うことになる。

(3)授業改善のシステム化の課題

社会科教育における授業改善の方法論として，自らが拠り所とする社会科の理念や授業観それ自体を相対化し，異なる他の授業のあ

り方との相違を対比・吟味した上で，自らの授業観を批判的に吟味し，授業改善を図る螺旋ＰＤＣＡを提出した。それは，第一段階の学習成果における授業類型の確定，第二段階の各々の資質形成に応じた授業のＰＤＣＡサイクル，第三段階，自らが依拠する授業観それ自体を相対化し，異なる授業観との相違を吟味した上で授業改善を図る螺旋ＰＤＣＡサイクルである。しかし，この方法論の有効性の検証のためには，社会科の授業改善がなかなか進まなかった原因を究明し，状況に応じた改善方法を提出することが考えられる。

個々の教員においては教科固有の授業力とは何か，授業力向上の要素を明らかにする。このことは，社会科に限らず，他教科においても授業それ自体を対象化し省察することができる職能の成長機能を明らかにすることに繋がる。また，研究グループや研修組織に対しては，授業力向上のための継続的で効果のある研修のあり方やＰＤＣＡシステムを早急に構築する必要がある。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計８件）

①峯明秀，知識の量的拡大・効率化を図る社会科授業ＰＤＣＡ，社会科研究，　71 号，pp.51-60，2009，査読有
http://ci.nii.ac.jp/naid/110007997260

②峯明秀，自分と関わる発言・表現の多様化を図る社会科授業のＰＤＣＡサイクル－学習者が社会問題を認識し，自らの生き方を追究する授業（有田和正実践）分析－，社会科教育研究，第 108 号，pp.19-31，2009，査読有，
http://ci.nii.ac.jp/naid/120002694419

③峯明秀，学習者の内面の表出を図る社会科授業の PDCA サイクル－自らの生き方を追究させる築地実践の分析を通して－，社会系教科教育学研究，第 21 号，pp.11-20，2009，査読有，
http://ci.nii.ac.jp/naid/120002648110

④峯明秀，知識の構造・推論の組織化を図る授業ＰＤＣＡ－社会の見方・考え方を探求する社会科－，社会認識教育学研究，25 号，pp.1-10，2010，査読有

⑤峯明秀，教員養成大学における大学院生による社会科授業ＰＤＣＡを意識した学び合い，大阪教育大学社会科教育学研究，９号，pp.31-40，2010，査読無，

⑥峯明秀，社会科授業改善研究の方法論の研究－メタ・レッスンスタディのアプローチ－，大阪教育大学紀要，第Ｖ部門，60 号，2011，　pp.1-16，査読無
http://ci.nii.ac.jp/naid/120003460067

⑦峯明秀，マイニング・ソフトの利用による授業事実の抽出，大阪教育大学社会科教育学研究，10 号，2012，pp.21-30，査読有

⑧Akihide Mine, Revolution of Methodology for Improvement of the Social Studies Lesson: Spiral PDCA Cycle Based on Difference in Quality Formation, The Journal of Social Studies Education , №1, pp.11-28, 2012, non peer review

〔学会発表〕（計７件）

①峯明秀，知識の量的拡大・効率化を図る社会科授業ＰＤＣＡ－客観的実在としての社会の事実的知識を獲得する授業－，第 58 回全国社会科教育学会全国研究大会，弘前大学，2009.10.10

②峯明秀，自分と関わる発言・表現の多様化を図る社会科授業のＰＤＣＡサイクル－学習者が社会問題を認識し，自らの生き方を追究する授業－，第 59 回日本社会科教育学会全国研究大会，香川大学，2009.11.23

③峯明秀，行動・参加による振り返りを図る授業ＰＤＣＡ－市民性の育成をめざす社会科授業－，第 21 回 日本公民教育学会全国研究大会「課題研究」，京都教育大学，2010.6.19

④峯明秀，社会科授業改善の方法論の改革－資質形成の相違に応じた螺旋ＰＤＣＡサイクル－，全国社会科教育学会第 59 回全国研究大会シンポジウム，同志社大学，2010.10.30

⑤峯明秀，社会科授業改善研究の方法論の研究－メタ・レッスンスタディのアプローチ－，社会系教科教育学会第 22 回研究大会課題研究，兵庫教育大学，2011.2.20

⑥峯明秀，The Methodology of Social Studies Lessons Improvement by Spiral PDCA cycles, The Japanese Society for Curriculum Studies: Hokkaido Conference (2011), Hokkaido University, 2011.7.16

⑦峯明秀・池田良，社会科授業におけるＰＤＣＡサイクル構築の実証的研究Ｉ－教員集団による「授業改善」の取組と課題－，社会系教科教育学会第 23 回研究大会，兵庫教育大学，2012.2.19

〔図書〕（計１件）

峯明秀，風間書房，社会科授業改善の方法論改革研究－資質形成の相違に応じた螺旋ＰＤＣＡサイクル－，　2011.11，全 p.180

〔その他〕

６．研究組織

(1)研究代表者

峯明秀（MINE AKIHIDE）
大阪教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：10379323